

デートDV、こんな時 相手が怖い、コントロール

中央大学ハラスメント防止啓発支援室嘱託カウンセラー
田村 伴子

**5人に1人がデートDVで
命の危険を感じている!**

DVやデートDVという言葉は、ずいぶんと広まってきましたが、その実態や内容まで知っている人はまだ3割にすぎません。「デートDV」というと、付き合っている相手を「殴る、蹴る、こすぐ」など、身体への暴力があげられます。そんなことはめったにないのではと思われるかもしれませんが、調査によると、交際相手から身体的暴力を受けて命の危険を感じたことがある人は、驚くことに5人に1人にのぼります(男女別では、女性が23.3%、男性が13.7%)。

本学でデートDVの相談を受けていると、身体的暴力が激しくなっていることに驚きます。たとえば、「携帯やPCを壊す」「ナイフで脅す」「沸騰している油に顔を近づける」など、暴力行為がエスカレートしています。男性から女性への暴力が多いのですが、激しい暴力に抵抗しようと、防御する側もまた、暴力を使って身を守り、結果として暴力が激しくなる傾向もみられます。テレビやHP、DVDの画像から「当たり前のよう」に激しい暴力が流される現在社会で、暴力に対する感性が鈍ってきているのではないかと心配になります。

しかし、デートDVは身体的暴力だけではありません。ほかに、複合的な暴力が絡み合っています。具体的には、「相手をなじる、バカにする、無視する」「行動や交友関係を制限する」などの心理的に攻撃する精神的暴力、相手が嫌がっているのに「恋人なのだから」とキスやセックスなど性的な行為を強要する性的暴力、さらに、「お金が必要なのにアルバイトをさせない」「相手のお金を管理して使わせない」などの経済的暴力も含まれます。実際に、交際相手がいる人のうち、「身体的暴力」「精神的暴力」「性的暴力」の3つの被害を受けたことがある人は女性で13.7%、男性で5.8%もいるのです。

「本当にそんな現状があるの?」と思われるかもしれませんが、被害を受けている当人はなかなか友達にも相談できず、その実態はまだまだ十分に知られてはいないのです。



**「逃げない方も悪い」という
大きな誤解**

デートDVの話をする時、決まって「それほどひどい暴力を受けているのに、なぜ逃げないの? 別れないの?」との質問がきます。付き合っているだけで、結婚も同居もしていないのだから、別れればいいのかという疑問です。

けれども実際に、交際相手から暴力をふるわれた人の約4割は、「別れたい(別れよう)と思ったが、別れなかった」との調査結果があります。その理由をみると、2割の人が「相手が同意しなかったから別れられなかった」と言っています。被害者本人が別れようとする時さらに暴力がひどくなり、怖くて逃げられず、結果的にあきらめて相手の言いなりになることが多いのです。

また、2割以上(23.2%)が「相手には自分が必要だと思ったから」と答えています。暴力をふるう相手に対して、なぜ自分が必要とされていると思うのか疑問に感じるかもしれませんが、被害者の多くはそのような気持ちになることは事実です。

というのは、DVという「力とコントロール」の構造があり、「相手をケアし、役立つことで自分の存在意義を感じる」という意識に被害者がびったりとはまり込んでしまうからです。

DVやデートDVでは、いつもいつも相手が激しい暴力をふるっているわけではありません。暴力をふるった後は優しくなり、相手は「やっぱり君がいなくちゃ、駄目なんだ」「君が一番自分のことを理解してくれている」「愛している」などと言います。する

どうする？ されていると思ったら…

と、「私はこの人から必要とされている(だから、見捨てられたくない)」「自分も相手をも見捨てることはできない」と思い込んでしまうのです。

とくに、加害者側から友人関係を絶たれたり制限されている、家庭に虐待やDV、不和があって被害者がいつも一人だと感じる家族関係・成育環境がある(あつたりする)と、この構造にはまり込みやすく、また、離れにくくなると言われています。そして、一方が他方に気を使い、相手の意に沿うよう行動するという不均衡な関係が出来上がってしまうと、一方が相手にコントロールされること(すること)が、当たり前になってしまうのです。その関係は、互いを尊重し合う対等なものではありません。ですから、「私がいなくてはこの人はだめになってしまう」「あの人には私が必要」との思いは、幻想にすぎません。

さらに、「自分が望んでいるのだから、本人の自由でしょう?」という見方もできます。しかし、一方が他方に、一方的にコントロールされる関係が固定されてしまうと、自分の感情や気持ちよりも「相手が何を望むか、相手を怒らせないためにどうすればいいか」が優先され、次第に「自分自身の感情がわからなくなり」「自分が自分でなくなっていく」、自分自身の人生を生きられなくなります。

とくにこの傾向は、女性に多く見られます。日本では、女性の方がよりケア役割を強いられ、相手の「役に立っている」ことで価値があると思い、周りもそのように認める社会文化の背景があります。そうした男性と女性の間でのジェンダーバイアス(社会的文化的性差による偏り)によって、デートDVを受けていても、なかなか離れられないケースが多いのです。ですから、離れられない原因には、「力とコントロール」が固定されるDVの構造と意識があることを見落としてはならないのです。

デートDV被害を受けている人の6割が 結婚後もDV被害を受けている

さらに気になるのが、デートDVの被害経験がある人は、結婚してからでもDVを受ける傾向があるとの結果です。デートDVの被害を受けた人の6割が結婚してもDVを受けていて、その割合は、デートDV被害を受けていない人の2倍になっています。

若い時にデートDVを受け、「自分は悪くない」と思っても、相

手を怒らせないような行動のパターンを無意識に身につけてそれに「慣れて」しまうと、同じようなパターンでうまくいく相手を無自覚に選んでしまう傾向があると言えます。もちろんDVについての正しい知識や情報を学び、カウンセリング等を受ければ、暴力のある関係を回避することはできます。しかし、無意識・無自覚のまましていると、暴力が連鎖するサイクルに入ってしまう可能性が高くなっていくといえるのです。

否定せずに友達の悩みを 聴いてほしい!

デートDVを受けていても、約半数の人は誰にも相談していません。また、3割以上が「自分にも悪いところがあると思い」と自分を責めています。さらに、2割以上が「相談しても信じてもらえない、責められると思い、最初から相談をしない」「自分さえ我慢すればいいんだ」と思っています。

デートDVは、恋人同士の親密な間柄でおこるために、なかなかオープンにしにくい話題です。しかも、「自分で選んだことだけに、自分で何とかしなくては、できるのでは」と思ってしまうがちです。ですから、やっとの思いで友人に相談した時に「そんなこと言っても、あなたが選んでいることでしょう」「それって愛されている証拠よ」などと言われたら、その本人はもう友達には相談しようと思わなくなるでしょう。

ですから、デートDVで悩んでいる友人がいたら、否定せずにまず相手の気持ちをだまって聴いてあげてください。そして、自分たちだけで何とかしようと思わず、専門家の力も頼ってください。中央大学では、デートDVや家族のDVによる悩みも受け付けています。

デートDVだけでなく、つきまといやストーカー被害の相談も増えています。別れた後つきまとわれる、交際を断って変なメールを送られるなども、自分だけで対処しようとせず相談してみてください。

ハラスメント防止啓発支援室

電話 042-674-3507

Eメール harass-soudan@tamajs.chuo-u.ac.jp